岷山の隠士

国枝史郎

1

「いや彼は隴西（ろうせい）の産だ」
「いや彼は蜀（しょく）の産だ」
「とんでもないことで、巴西（はせい）の産だよ」
「冗談を云うな山東（さんとう）の産を」
「李広（りこう）［＃「李広（りこう）」は底本では「季広（りこう）」］の後裔だということだね」
「涼武昭王暠（りょうぶしょうおうこう）の末だよ」
――青蓮居士謫仙人（せいれんこじたくせんにん）、李太白の素性なるものは、はっきり解（わか）っていないらしい。
金持が死ぬと相続問題が起こり、偉人が死ぬと素性

争いが起こる。
偉人や金持になることも、ちょっとどうも考えものらしい。

李白十歳の初秋であった。県令の下（もと）に小奴となった。
ある日牛を追って堂前を通った。
県令の夫人が欄干に倚（よ）り、四方（あたり）の景色を眺めていた。
穢らしい子供が、穢らしい牛を、臆面もなく追って行くのが、彼女の審美性を傷付けたらしい。
「無作法ではないか、外（よそ）をお廻り」
すると李白は声に応じて賦（ふ）した。

「素面欄鉤（らんこう）ニ倚リ、嬌声外頭（がいとう）ニ出ヅ、若シ是織女ニ非ズンバ、何ゾ必シモ牽牛ヲ問ハン」

これに驚いたのは夫人でなくて、その良人（おっと）の県令であった。

早速引き上げて小姓とした。そうして硯席に侍（はべ）らせた。

ある夜素晴らしい山火事があった。

「野火山ヲ焼クノ後、人帰レドモ火帰ラズ」

県令は苦心してここまで作った。後を附けることが出来なかった。

「おい、お前附けてみろ」

県令は李白へこう云った。
十歳の李白は声に応じて云った。
「焔ハ紅日（こうじつ）ニ随ツテ遠ク、煙ハ暮雲ヲ逐（お）ツテ飛ブ」
県令は苦々しい顔をした。それは自分よりも旨いからであった。
五歳にして六甲を誦し、八歳にして詩書に通じ、百家を観たという寧馨児（ねいけいじ）であった。田舎役人の県知事などが、李白に敵うべき道理がなかった。
ある日美人の溺死人があった。
で、県令は苦吟した。
「二八誰ガ家ノ女、飄トシテ来リ岸蘆（がんろ）ニ倚ル、鳥ハ

眉上(びじょう)ノ翠(すい)ヲ窺ヒ、魚ハ口傍(こうぼう)ノ朱ヲ弄(ろう)ス」

すると李白が後を継いだ。

「緑髪ハ波ニ随(したが)ツテ散リ、紅顔ハ浪ヲ逐(お)ツテ無シ、何ニ因(よ)ツテ伍相(ごしょう)ニ逢フ、応(まさ)ニ是秋胡(しゅうこ)ヲ想フベシ」

また県令は厭な顔をした。

で李白は危険を感じ、事を設けて仕(つかえ)を辞した。

詩的小人というものは、俗物よりも嫉妬深いもので、それが嵩ずると偉いことをする。

李白の逃げたのは利口であった。

剣を好み諸侯を干(かん)して奇書を読み賦(ふ)を作る。――十五歳迄の彼の生活は、まずザッとこんなものであった。

年二十性倜儻（てきとう）、縦横の術を喜び任俠を事とす。——

これがその時代の彼であった。

財を軽んじ施（し）を重んじ、産業を事とせず豪嘯す。——こんなようにも記されてある。

ある日喧嘩をして数人を切った。

土地にいることが出来なかった。

このころ東巌子（とうがんし）という仙人が、岷山（みんざん）の南に隠棲していた。

で、李白はそこへ走った。

聖フランシスは野禽を相手に、説教をしたということであるが、東巌子も小鳥に説教した。彼は道教の道

士であった。

彼が山中を彷徨（さまよ）っていると、数百の小鳥が集まって来た。頭に止まり肩に止まり、手に止まり指先へ止まった。そうして盛んに啼き立てた。

それへ説教するのであった。

李白はそこへかくまわれることになった。

ある日李白が不思議そうに訊いた。

「小鳥に説教が解（わか）りましょうか？」

「馬鹿なことを云うな、解るものか。あんなに無暗（むやみ）と啼き立てられては、第一声が通りやアしない」

「何故集まって来るのでしょうか？」

「俺が毎日餌をやるからさ。小鳥にもてるのもいいけれど、糞を掛けられるのは閉口だ」

一度彼が外出すると、彼の道服は鳥の糞で、穢ならしい飛白（かすり）を織るのであった。

「一体道教の目的は、どこにあるのでございましょう？」

ある時李白がこう訊いた。

「つまりなんだ、幸福さ」

「幸福を得る方法は？」

「長命（ながいき）することと金を溜めることとさ」

洵（まこと）にあっさりした答えであった。

2

「どうしたら金が溜まりましょう？」
「働いて溜めるより仕方がない」
「その癖先生はお見受けする所、ちっとも働かないじゃありませんか」
「うん、どうやらそんな格好だな」
「働かないで溜める方法は？」
「よくこの次までに考えて置こう」
一向張り合いのない挨拶であった。
「どうしたら長命が出来ましょう」

「いろいろ方法があるらしい」

「それをお教え下さいませんか」

「俺には解っていないのだよ」

「物の本で読みました所、内丹説、外丹説、いろいろあるようでございますね。枹木子（ほうぼくし）などを読みますと」

「ほほう、それではお前の方が学者だ。ひとつ俺へ話してくれ」

　李白これには閉口してしまった。

　ある日東巖子が李白へ云った。

「天とは一体どんなものだろう？」

「ははあこの俺を験（ため）す気だな」

すぐに李白はこう思った。

「道教の方で申しますと、天は百神の君だそうで、上帝、旻天（びんてん）、皇天などとも、皇天上帝、旻天上帝、維皇上帝、天帝などとも、名付けるそうでございますが、意味は同じだと存じます。天は唯一絶対ですが、その功用は水火木金土、その気候は春夏秋冬、日月星辰（じつげつせいしん）を引き連れて、風師雨師（ふうしうし）を支配するものと、私はこんなように承（うけたま）わって居ります」

「ふうん、大変むずかしいんだな。俺にはそんなようには思われないよ。色が蒼くて真丸（まんまる）で、その端が地の上へ垂れ下っている。こんなようにしか思われないが

な」

　これには李白もギャフンと参った。

「地についてはどう思うな？」

　これは浮雲（あぶな）いと思いながらも、真面目に答えざるを得なかった。

「地は万物の母であって、人畜魚虫山川草木、これに産れこれに死し、王者の最も尊敬するもの、冬至の日をもって方沢（ほうたく）に祭ると、こう書物で読みましたが」

「お前の云うことはむずかしいなあ。俺にはそんなようには見えないよ。変な色の、変に凸凹した、穢ならしいものにしか見えないがね」

これにも李白は一言もなかった。
「お前は人の性をどう思うね？」
「はい、孔子に由る時は、『人之性直（ひとのせいちょく）。罔之生也（これをくらますはせいなり）。幸而免（さいわいにまぬかれよ）』こうあったように思われます。しかし孟子は性善を唱え、荀子は性悪を唱えました。だが告子は性可能説を唱え、又楊雄（ようゆう）、韓愈（かんゆ）等は、混合説を唱えましたそうで」
「だがそいつは他人の説で、お前の説ではないじゃアないか」
「あっ、さようでございましたね」
「で、お前はどう思うのだ？」

「さあ、私には解(わか)りません」
「解るように考えるがいい」
「あの、先生にはどう思われますので？」
「俺か、俺はな、そんなつまらない事は、考えない方がいいと思うのさ。形而上学的思弁といって、浮世を小うるさくするものだからな」
　これには李白は何となく、教えられたような気持がした。
「不味(まず)［＃ルビの「まず」は底本では「まづ」］い物ばかり食っていると、肉放れがして痩せてしまう。美味(うまい)物を食え美味物を」

こう口では云いながら、稗（ひえ）だの粟（あわ）だの黍（きび）だのを、東巖子は平気で食うのであった。

「綺麗な衣裳（きもの）を着るがいい。そうでないと他人（ひと）に馬鹿にされる」

こう云いながら東巖子は、一年を通してたった一枚の、穢い道服を着通すのであった。

「出世をしろよ、出世をしろよ、いい主人を目つけてな」

こう云いながら東巖子は、山から出ようとはしないのであった。

彼は言行不一致であった。

それがかえって偉かった。
彼は盛んに逆理を用いた。
李白は次第に感化された。倜儻不羈の精神が、軽快酒脱［＃「酒脱」は底本では「酒脱」］の精神に変った。
ある日突然東巖子が云った。
「お前は山川をどう思うな？」
「山は土の盛り上ったもの、川は水の流れるもの、私にはこんなように思われます」
「さあさあお前は卒業した。山を出て世の中へ行くがいい」
――で、翌日岷山を出た。

3

開元十二年のことであった。

李白は出でて襄漢（じょうかん）に遊んだ。まず南洞庭（どうてい）に行き、西金陵（にしきんりょうよう）揚州に至り、さらに汝海（じょかい）に客となった。それから帰って雲夢（うんぽう）に憩った。

この時彼は結婚した。妻は許相公（きょそうこう）の孫娘であった。

数年間同棲した。

さらに開元二十三年、太原（たいげん）方面に悠遊した。

哥舒翰（かじょかん）などと酒を飲んだ。

また譙郡（しょうぐん）の元参軍（げんさんぐん）などと、美妓を携えて晋祠（しんし）など

に遊んだ。

やがて去って斉魯（せいろ）へ行き、任城（にんじょう）という所へ家を持った。孔巣父（こうそうほ）、裴政（はいせい）、張叔明（ちょうしゅくめい）、陶沔（とうべん）、韓準（かんじゅん）というような人と、徂徠山（そらいざん）に集って酒を飲み、竹渓の六逸と自称したりした。

こうして天宝（てんほう）元年となった。

この時李白四十二歳、詩藻全く熟しきっていた。

会稽（かいけい）の方へ出かけて行った。

剡中（えんちゅう）に呉筠（ごいん）という道士がいた。

二人はひどくウマが合った。共同生活をやることにした。

東巖子に比べると呉筠の方は、ちょっと俗物の所があった。それだけにその名は喧伝されていた。

時の皇帝は玄宗であった。

「剡中の呉筠を見たいものだ」

こんなことを侍臣に洩らした。

呉筠の許へ勅使が立った。

出て行かなければならなかった。

「おい、お前も一緒に行きな」

「うん、よし来た、一緒に行こう」

李白は早速行くことにした。

やがて二人は長安へ着いた。

長安で賀知章(がちしょう)と懇意になった。
賀知章は李白を一見すると、驚いたようにこう云った。
「君は人間なのか仙人なのか？」
「どうもね、やはり人間らしい」
「仙人が誤って人間になると、君のような風采になるだろう。君は謫(たく)[#ルビの「たく」は底本では「てき」]せられた仙人だよ」
「まあさ、見てくれ、謫仙人の詩を」
李白は旧稿を取り出して見せた。
賀知章はすっかり参ってしまった。

「素晴らしい物を作りゃアがる。こいつちょっと人間業じゃアねえ。君のような人間に出られると、僕の人気なんかガタ落ちだ。だがマアマア結構なことだ。御世万歳、文運隆盛、大いに友達に紹介しよう」

「話せる奴でもいるのかい？」

「杜甫という奴がちょっと話せる」

「聞かないね、そんな野郎は」

「だが会って見な、面白い奴だ。だがちっ、、とばかり神経質だ」

「そんな野郎は嫌いだよ」

「まあまあそういわずに会って見なよ。君とは話が合

うかもしれない。ひょっとかすると好敵手かもしれない」

「幾歳（いくつ）ぐらいの野郎だい？」

「そうさな、君よりは十二ほど若い」

「面白くもねえ、青二才じゃアないか」

「止めたり止めたり食わず嫌いはな」

「どうも仕方がねえ、会うだけは会おう」

杜甫は名門の出であった。

左伝癖（さでんへき）をもって称された、晋の杜預の後胤であった。

曾祖の依芸（いげい）は鞏県（きょうけん）の令、祖父の審言（しんげん）は膳部員外郎で

あった。審言は一流の大詩人で、沈佺期（ちんせんき）、宋之門（そうしもん）と名を争い、初唐の詩壇の花形であった。

父の閑（かん）は奉天（ほうてん）の令で、公平の人物として名高かった。

杜甫は随分傲慢であった。弱い癖に豪傑を気取り、不良青年の素質もあった。ひどく愛憎が劇しかった。それに肺病の初期でもあった。立身出世を心掛けた。その顔色は蒼白く、その唇は鉛色であった。いつもその唇を食いしばっていた。人を見る眼が物騒であった。相手の弱点を見透しては、喰い付いて行くぞというような、変に物騒な眼付であった。威嚇的な物の云い方をした。その癖すぐに泣事を云った。

決して感（かんじ）のいい人間ではなかった。

体質から云えば貧血性であったが、気質から云えば多血質であった。

いつも不平ばかり洩らしていた。

だが意外にも義理堅く、他人の恩を強く感じた。

忠義心が深かった。

義理堅いのをのぞきさえすれば、彼は実に完全に、近代芸術家型に嵌まった。

彼の幼時は不明であった。

が、彼の詩を信じてよいなら――又信じてもよいのであるが――七歳頃から詩作したらしい。

「往昔十四五、出デテ遊ブ翰墨（かんぼく）場、斯文崔魏（しぶんさいぎ）ノ徒、我ヲ以テ班揚ニ比ス、七齢思ヒ即チ壮、九齢大字ヲ書シ、作有ツテ一嚢（のう）ニ満ツ」

すなわちこれが証拠である。

「七歳ヨリ綴ル所ノ詩筆、四十載（さい）、向フ矣（い）、約千有余篇」

こんなことも書いてある。

開元十九年二十歳の時、呉越方面へ放浪した。

四年の間を放浪に暮らし、開元二十三年の頃、京兆の貢挙（こうきょ）に応じたものである。

だが旨々（うまうま）落第してしまった。

4

彼はすっかり落胆した。

奉天の父の許へ帰って行った。泰山（たいざん）を望んで不平を洩らした。

二年の間ブラブラした。

それから斉（せい）や趙（ちょう）［＃ルビの「ちょう」は底本では「しょう」］に遊んだ。

それから長安へ遣って来たのであった。

李白と杜甫との会見は、賀知章が心配したほどにも

なく、非常に円滑に行なわれた。

会後李白が賀知章へ云った。

「彼は頗(すこぶ)る人間臭い。それが又彼のよい所だ。詩人として当代第一」

また杜甫はこう云った。

「なるほどあの人は謫仙人だ。僕はすっかり面喰ってしまった。詩人としては第一流、とても僕など追っ付けそうもない」

互いに推重をしあったのであった。

李適之(りてきし)、汝陽(じょよう)、崔宗之(さいそうし)、蘇晋(そしん)、張旭(ちょうぎょく)、賀知章(がちしょう)、焦遂(しょうすい)、それが杜甫と李白とを入れ、八人の団体が出来上って

しまった。

飲んで飲んで飲み廻った。

いわゆる飲中の八仙人であった。

酒はあんまりやらなかったが、一世の詩宗高適などとも、李白や杜甫は親しくした。

三人で吹台や琴台へ登り、各自（めいめい）感慨に耽ったりした。

※[#「りっしんべん＋更」、662-15]慨するのは杜甫であり、物を云わないのは高適であり、笑ってばかりいるのは李白であった。

高適の年五十歳、李白の年四十四歳、杜甫の年三十二歳であった。

だがこの時代は李太白が、誰よりも詩名が高かった。玄宗皇帝が会いたいと云った。で、李白は御前へ召された。

誰が李白を推薦したかは、今日に至っても疑問とされている。

ある人は道士呉筠［＃「筠」は底本では「※［＃「くさかんむり／均」、662-下-1］」］だと云い、ある人は玉真公主だと云い、又ある人は賀知章だと云った。

すべて人間が出世すると、俺が推薦した俺が推薦したと、推薦争いをするものであるが、これも将しくその一例であった。

金鑾殿（きんらん）という立派な御殿で、玄宗は李白を引見した。帝、食を賜い、羹（あつもの）を調し、詔あり翰林（かんりん）に供奉（ぐぶ）せしむ。――これがその時の光景であった。非常に優待されたことが、寸言の中に窺われるではないか。

彼は翰林供奉となっても、出勤しようとはしなかった。長安の旗亭に酒を飲み、いう所の管ばかりを巻いていた。

「李白に会いたいと思ったら、長安中の旗亭を訪ね、一番酔っぱらっている人間に、話しかけるのが手取早い。間違いなくそれが李白なのだからな」

人々は互いにこんなことを云った。

その時唐の朝廷に一大事件が勃発した。渤海国の使者が来て、国書を奉呈したのであった。国書は渤海語で書かれてあった。満廷読むことが出来なかった。

玄宗皇帝は怒ってしまった。

「蕃書を読むことが出来なければ、返事をすることが出来ないではないか。渤海の奴らに笑われるだろう。彼奴ら兵を起こすかもしれない。国境を犯すに相違ない。誰か読め誰か読め！」

百官戦慄して言なし矣であった。

そこへ遣って来たのが李白であった。

飄々乎(こ)として遣って来た。
「おお李白か、いい所へ来た。……お前、渤海語が解(わか)るかな？」
「私、日本語でも解ります。まして謂んや渤海語など」
「それは有難い。これを読んでくれ」
渤海の国書を突き出した。
李白は一通り眼を通した。
「では唐音に訳しましょう」
そこで彼は声高く読んだ。
「渤海奇毒(きどく)の書、唐朝官家に達す。爾(なんじ)、高麗(こうらい)を占領せしより、吾国の近辺に迫り、兵屢(しばしば)吾界(さかい)を犯す。おも

うに官家の意に出でむ。俺如今耐《われじょこんた》うべからず。官を差し来り講じ、高麗一百七十六城を将《もっ》て、俺に讓与せよ。俺好物事あり、相送らむ。太白山の兎、南海の昆布、柵城の鼓、扶余《ふよ》の鹿、鄭頡《ていきつ》の豚、率賓《そつびん》の馬、沃州綿《ようしゅうめん》［＃ルビの「ようしゅうめん」は底本では「ようしうめん」］、湄沁河《びんひつが》の鮒、九都の杏、楽遊《がくゆう》の梨、爾、官家すべて分あり。若《も》し高麗を還《かえ》すことを肯んぜずば、俺、兵を起こし来たって厮殺せむ。且《か》つ那家《いずれ》が勝敗するかを看よ」

　皇帝はじめ文武百官は、すっかり顔色を変えてしまった。

「いま辺境に騒がせられては、ちょっと防ぐに策はない。一体どうしたらいいだろう」
風流皇帝の顔色には、憂が深く織り込まれた。
誰一人献策する者がなかった。

5

すると李白が笑いながら云った。
「文章で嚇（おど）して来たのです、文章で嚇して帰しましょう。蕃使をお招きなさりませ、私、面前で蕃書を認め、嚇しつけてやることに致します」
翌日蕃使を入朝せしめた。

皇帝を真中に顯官が竝んだ。

紗帽（さぼう）を冠り、白紫衣（はくしい）を着け、飄々と李白が現われた。勿論微醺を帯びていた。

座に就（つ）くと筆を握り、一揮して蕃書を完成した。

まず唐音で読み上げた。

「大唐天宝皇帝、渤海の奇毒に詔諭す。むかしより石卵は敵せず、蛇龍は闘わず。本朝運に応じ、天を開き四海を撫有し、将は勇、卒は精、甲は堅、兵は鋭なり。頡利（きつり）は盟に背いて擒（とりこ）にせられ、普賛（ふさん）は鵞を鑄って誓を入れ、新羅（しらぎ）は織錦の頌を奏し、天竺（てんじく）は能言の鳥を致し、沈斯（ちんし）は捕鼠の蛇を献じ、払林（ふつりん）は曳馬の狗を進め、

白鸚鵡は訶陵（かりょう）より来り、夜光珠は林邑（りんゆう）より貢し、骨利幹（こつりかん）に名馬の納あり、沈婆羅（ちんばら）に良酢の献あり。威を畏れ徳に懐（なず）き、静を買い安を求めざるなし、高麗命を拒（ふせ）ぎ、天討再び加う。伝世百一朝にして殄滅す。豈（あ）に逆天の咎徴、衝大の明鑒に非ずや。況（いわん）や爾は海外の小邦、高麗の附国、之を中国に比すれば一郡のみ。士馬芻糧万分に過ぎず。螳怒是れ逞（たくま）うし、鵝驕不遜なるが若（ごと）きだに及ばず。天兵一下、千里流血、君は頡利の俘（とりこ）に同じく、国は高麗の続とならむ。方今聖度汪洋、爾が狂悖を恕す。急に宣しく[#「宣しく」はママ]過を悔い、歳事を勤修し、誅戮を取りて四夷（い）の笑となる毋（なか）

れ。爾其れ三思せよ。故に諭す」

実にどうどうたるものであった。

皇帝はすっかり喜んでしまった。

そこで李白は階を下り、蕃使の前へ出て行った。文字通り蕃音で読み上げた。

蕃使面色土のごとく、山呼拝舞し退いたというが、これはありそうなことである。

奇毒、すなわち渤海の王も、驚愕来帰したということである。

「俺は長安の酒にも飽きた」

で、李白は暇（いとま）を乞うた。

皇帝は金を李白に賜った。

李白の放浪は始まった。北は趙（ちょう）魏（ぎ）燕晋（えんしん）［＃ルビの「しん」は底本では「し」」から、西は※岐（ぶんき）［＃「分＋おおざと」、664-上-20］まで足を延ばした。商於（しょうお）を歴（へ）て洛陽に至った。南は淮泗（わいし）から会稽（かいけい）に入り、時に魯中（ろちゅう）に家を持ったりした。斉や魯の間を往来した。梁宋には永く滞在した。

天宝（てんほう）十三年広陵に遊び、王屋山人魏万（ぎまん）と遇い、舟を浮かべて秦淮（しんわい）へ入ったり、金陵の方へ行ったりした。

魏万と別れて宣城（せんじょう）へも行った。

こうして天宝十四年になった。

ひっくり返るような事件が起こった。
安祿山が叛したのであった。
十二月洛陽を陥いれた。
天宝十五年玄宗皇帝は、長安を豪塵して蜀に入った。
李白の身辺も危険であった。宣城から漂陽にゆき、
更に剡中（えんちゅう）に行き廬山に入った。
玄宋皇帝の十六番目の子、永王というのは野心家であったが、李白の才を非常に愛し、進めて自分の幕僚にした。

安祿山と呼応して、永王は叛旗を飜えした。弟の襄成王（じょうせいおう）と舟師（しゅうし）を率い、江淮（こうわい）[#ルビの「こうわい」は底

本では「こうれい」」に向かって東下した。

李白は素敵に愉快だった。

「うん、天下は廻り持ちだ。天子になれないものでもない」

こんな事を考えた。

詩人特有の白昼夢とも云えれば、倜儻不羈（てきとうふき）の本性が、仙骨を破って迸しったとも云えた。

意気頗（すこぶ）る軒昂であった。自分を安石（あんせき）に譬えたりした。二十歳代に人を斬った、その李白の真骨頭［#「真骨頭」はママ］が、この時躍如としておどり出たのであった。

「三川北虜乱レテ麻ノ如シ、四海南奔（なんぽん）［＃ルビの「なんぽん」は底本では「なんぱん」］シテ永嘉ニ似タリ、但東山ノ謝安石（しゃあんせき）ヲ用ヒヨ、君ガ為メ談笑シテ胡沙（こさ）ヲ静メン」

などとウンと威張ったりした。

「試ミニ君王ノ玉馬鞭（ぎょくばべん）ヲ借リ、戎虜（じゅうりょ）ヲ指揮シテ瓊筵（けいえん）ニ坐ス、南風一掃胡塵（こじん）静ニ、西長安ニ入ッテ日延ニ到ル」

　凱旋の日を空想したりした。

　ところが河南の招討判官、李銑（りせん）というのが広陵に居た。永王の舟師を迎え［＃「迎え」は底本では「迎へ」］討った。

永王軍は脆く破れた。

永王は箭（や）に中（あた）って捕えられ、ある寒駅で斬殺された。そうして弟の襄成王は、乱兵の兇刃に斃（たお）された。

李白は逃げて豊沢に隠れたが、目つかって牢屋へぶち込まれた。

「どうも不可（いけ）ねえ、夢だったよ」

憮然として彼は呟いた。

「兵を指揮するということは、韻をふむよりむずかしい。そうすると俺より安石の方が、人殺しとしては偉いらしい。もう君王の玉馬鞭なんか、仮にも空想しないことにしよう……。ひょっとかすると殺されるかも

しれねえ。何と云っても謀反人だからなあ、もう一度洞庭（どうてい）へ行って見たいものだ。松江の鱸（すずき）を食ってみたい。女房や子供はどうしたかな？　幾人女房があったかしら？　あっ、そうだ、四人あったはずだ」

李白はちょっと感傷的になった。

無理もないことだ、五十七歳であった。

李白は皆に好かれていた。

新皇帝 粛宗（しゅくそう）に向かって、いろいろの人が命乞いをした。

宣慰大使（せんいたいし）崔渙（さいかん）や、御史中丞（ぎょしちゅうじょう）宋若思（そうじゃくし）や、武勲赫々たる郭子儀（かくしぎ）などは、その最たるものであった。

そこで李白は死を許され、夜郎へ流されることになった。

道々洞庭や三峡や、巫山（ふざん）などで悠遊した。

李白はあくまでも李白であった。竄逐（さんつい）［＃「竄逐（さんつい）」はママ］されても悲しまなかった。いや一層仙人じみて来た。人間社会の功業なるものが全然自分に向かないことを、今度の事件で知ってからは、人間社会その物をまで、無視するようになってしまった。

乾元（かんげん）二年に大赦があった。

まだ夜郎へ行き着かない中に、李白は罪を許された。

そこで江夏岳陽に憩い、それから潯陽（じんよう）へ行き金陵へ

行った。この頃李白は六十一歳であった。また宣城や歴陽へも行った。

あっちこっち歩き廻った。

到る所で借金をした。九割までは酒代であった。

のべつに客が集まって来た。

やがて宝応元年になった。

ある県令に招かれて、采石江で舟遊びをした。

すばらしく派手やかな宮錦袍を着、明月に向かって酒気を吐いた。

波がピチャピチャと船縁を叩いた。

十一月の月が水に映った。

「ひとつ、あの月を捕えてやろう」

人の止めるのを振り払い、李白は水の中へ下りて行った。

水は随分冷たかった。

彼の考えはにわかに変わった。

どう変わったかは解らない。

李白は水中をズンズン歩いた。

やがて姿が見えなくなった。

それっきり人の世へ現われなかった。

「李白らしい死に方だ」

人々は愉快そうに手を拍った。

東巖子（とうがんし）は岷山（みんざん）にいた。

相変わらず小鳥の糞にまみれ、相変らずぼんやりと暮らしていた。

ある日薄穢い老人が、東巖子を訪れて来た。

「先生しばらくでございます」

「誰だったかね、見忘れてしまった」

老人は黙って優しく笑った。

なるほどまさしく薄穢くはあったが、底に玲瓏たる品位があった。人間界のものであり、同時に神仙のものである、完成されたる品位であった。

で、東巖子は思わず云った。
「おお貴郎（あなた）は老子様で？」
「いえ私は李白ですよ」
「いえ貴郎は老子様です」
東巖子は云い張った。
「どうぞ上座へお直り下さい」
李白は平気で上座へ直った。
数百羽の小鳥が飛んで来た。音を立てて庵の中へ入った。
そうして東巖子の頭や肩へ……いや小鳥は東巖子へは行かずに、李白の頭や肩へ止まった。すぐに李白は

糞まみれになった。

今でも岷山のどの辺りかに、李白とそうして東巖子とが、小鳥を相手に日向（ひなた）ぼっこをして、住んでいる事は確かである。

底本：「国枝史郎伝奇全集　巻六」未知谷
1993（平成5）年9月30日初版発行
初出：「大衆文芸」
1926（大正15）年4月
※漢詩漢文の読み下し文の旧仮名づかいは底本通りです。また促音の大小の混在も底本の通りです。
入力：阿和泉拓
校正：門田裕志、小林繁雄
2005年10月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。